

第七章——念仏者は無碍の一道(2)

加来 雄之

第七章	試訳
<p>① ^セ一</p> <p>② 念仏者は無碍の一道なり。</p> <p>③ そのいはれいかんとならば、</p> <p>④ 信心の行者には、</p> <p>⑤ 天神地祇も敬伏し、</p> <p>⑥ 魔界外道も障碍することなし。</p> <p>⑦ 罪惡も業報を感ずることあたはず。</p> <p>⑧ 諸善もおよぶことなきゆへなり</p> <p>⑨ と云々</p>	<p>① (七) 一つ</p> <p>② 念仏〔する者〕は、〔なにものにも〕妨げられることのないひとすじの道である。</p> <p>③ その理由はどのようなことかというならば、</p> <p>④ 信心の行者には、</p> <p>⑤ 天の神や地の祇も敬意をはらってひれ伏し、</p> <p>⑥ 悪魔たちや〔仏教以〕外の異教の徒も障り妨げをすることはしない。</p> <p>⑦ 〔信心の行者には〕罪惡も業の報いを現わすことはできない。</p> <p>⑧ 〔また信心の行者には〕さまざまな善〔行〕も〔念仏には〕及ぶことがないからなのだ。</p> <p>⑨ と、〔親鸞聖人は〕仰いました。</p>

前回の質問に答えて

向井孝夫氏からの問いに答えて

Q:「天神地祇も敬服し、魔界外道も・・・の一文は、これらを決して否定しているのではなく、そういうものに頼ろうとする人の在り方にも温かい眼差しを注ぎ、それらをも包み込む一筋の、攝取不捨の一道を示そうとしているように思えます。そういう受け止めについて、先生のご意見はどうでしょうか」

→その通りだ と思います。実践としてはむずかしい問題だと思います。ただ否定と批判と排除という表現については考えてみたいと思います。また攝取と選択との関係も考える必要があるでしょう。改邪、歎異、悲歎という視点。「又言わく（徳王菩薩品）、「善男子。第一真実の善知識は、謂わゆる、菩薩・諸仏なり。」／「世尊。何を以ての故に。」／「常に三種の善調御を以ての故なり。何等をか三とする。一には畢竟軟語、二には畢竟呵責、三には軟語呵責なり。是の義を以ての故に菩薩・諸仏は即ち是れ真実の善知識なり。」（『聖典』（第2版）415頁）。

今日でも、人間がどうすることもできない自然や疫病などの事実の受けとめ方、人間のあり方を見失わせる心の内に潜む課題や思想・生き方という問題があります。自身や社会の罪惡に打ち拉がれることもあります。またさまざまな善（外道の相善、聖道門の万行諸善、浄土門の定散二

善)に惑わされることがあります。

これらにきちんと対する(「対偽対仮」とはどのようなことが問われなくてはなりません。

乗杉理氏の問いに答えて

Q:「多屋先生の見解が、学会の中で確定しているものだと理解しており、あらためて新鮮なお話を聞いて興味深かったです。／ただ、先生の見解について少し引っかかってしまうのは、無碍の一道という事が、仏である者の事象であり、凡夫の事象ではない様に思われ、そこにあえて、者、人をつけて行く事に、腑に落ちない様な、矛盾を感じてしまうのですが。」

→「無碍」は無碍光として如来の性質をあらわしますが、『浄土論註』では「「無碍」は、謂わく、生死即ち是れ涅槃なりと知るなり」とあります。「一道」は私たち凡夫が歩むことのできるただ一つの道という意味ではないでしょうか。「無碍の一道」は「無碍光如来によるただ一つの道」と理解してはどうでしょうか。

『経』(晋訳華嚴経)に言わく、「十方無碍人、一道より生死を出でたまえり。」「一道」は無碍道なり。「無碍」は、謂わく、生死即ち是れ涅槃なりと知るなり。是くの如き等の入不二の法門は無碍の相なり。

(行巻引用『浄土論註』『聖典』(第2版)215頁)

近藤さんの質問に答えて

Q:「天神地祇も敬伏し」は、信心を得たことにより天神地祇に対しても還相回向が見える、そこにも弥陀の本願が見える敬いなのでは?という解釈は考えすぎでしょうか?」

→この問いには質問者が「還相の回向」をどのように理解しておられるかをお聞きしてから答えるのがよいかもしれません。

=====

利他(他者)の三章から自利(自身の歩み)の三章へ……智慧の念仏(慈悲、回向、自然)によって与えられた関係のあり方(衆生、父母、師弟に象徴される生の関係)の中で、私たちはみずからの課せられた生の責任を果たしていく。

如来の光明もとの共同体は、私の分別でつくるのではない、むしろ私は如来の光明によって見出した共同体のなかで生きていくのである。

・『歎異抄』第七章は、天神地祇や魔界外道や罪障の存在を否定しているのではなく、念仏によってそれらとの関係が「無碍」となるとする。

「光雲無碍如虚空 一切の有碍にさわりなし」(『讚阿弥陀仏偈和讚』¹)とあるように、有碍にさわりがないのであって、有碍がないのではない。「無碍」は碍が存在しないということではなく、有碍にさわりがないという意味である。

仏教は無神論ではない、冥衆の存在を否定しているのではない。あらゆる事象が念仏の衆

¹ 顕智本では『一切の有碍』に「ヨロツコノヨノコトナリ」とある。(『浄典全二』338頁)

生として如来の摂取の中にあるという意味から受けとめなされなければならない。

・歴史を通して人々は神に対するおそれによって支配されてきた。神々のまえに跪いてきた。宗教は恐怖心から発生し、人々を奴隷にするものであった。親鸞は、そのような発想を転換した。

・無碍の内容が「敬伏し」「障碍することなし」「感ずることあたわず」と示されている。

・天神地祇は「敬伏」に、魔界外道は「障碍」に、罪悪は「業報を感ず」という関係として存在する。

第四章から第六章の関係存在……天神地祇、魔界外道

・『歎異抄』第七章の「そのいわれ」の構造（試案）

親鸞は「念仏者は無碍の一道なり」という「いわれ」をどのようにあきらかにしたのだろうか。「念仏者は」の「いわれ」は、「無碍の」のいわれは、「一道なり」のいわれはどのようにあきらかにされたのだろうか。そのことを第七章の構造によって考えてみたい。

・妙音院了祥師の科文

唯称無碍二

初、直示

…念仏者は、無碍の一道なり。

二、示由 二

初、衆障無碍

…そのいわれいかんとならば、信心の行者には、

神祇敬伏

…天神地祇も敬伏し、

魔界不障

…魔界外道も障碍することなし。

業繫無索

…罪悪も業報も感ずることあたわず、

二、諸善無対

…諸善もおよぶことなきゆえに

念仏者は	無碍の	一道なり
そのいわれいかんとならば		
信心の行者には	天神地祇も敬伏し 魔界外道も障碍することなし 罪悪も業報を感ずることあたわず	諸善もおよぶことなき ゆえなり
と云々（うんぬん）		

=====

⑤ 天神地祇も敬伏し、

(ア)「神祇敬伏」

初、衆障無碍

…そのいわれいかんとならば、信心の行者には、

神祇敬服

…天神地祇も敬伏し、

・天神地祇とは私たちにとってどのような存在であろうか。天地は自然であろう。その神は自然を運営する超自然な存在であろう。

・「も」という一字がこの句の印象を決定している。「も」という表現は天神地祇以外の存在を想定している。

・信心の行者が天神地祇を敬うのではない。「天神地祇」さえ「も」が信心の行者を尊敬し、平伏するというのである。

天神地祇の「敬」は善鬼神として念仏者を尊敬しまもること

天神地祇の「伏」は悪鬼神が念仏者に平伏すること。それは四天王や諸仏によって護られているから。

・天神地祇「を」畏れ敬うそれに平伏することは、仏に帰依する意味を見失わせる。

・当時の人々にとって親鸞のこの考え方は大それたものであったかもしれないが、その淵源ゴータマ・ブッダの正覚の説話による。

・曾我は「天神地祇」について「人間の最も厳密なる原始的なる純粹感情の表現の所依処」「外に神通応化せる感覺的象徴の主体」とし、さらに「主体と申しても無為自然に内外一如にて在す徳相」と解する。また「天つ神、国つ神を申す……天地自然に満ちたもう神々であり、人間の最も厳密なる原始的なる純粹感情の表現の所依処として、外に神通応化せる感覺的象徴の主体にて在す。勿論主体と申しても無為自然に内外一如にて在す徳相を申したのである。これは決して現代人が考えるところの多神教や汎神教ではなく、……通俗的民間信仰でも、迷信の対象でもない……神の示現ある時は仏法は栄え、神の示現のないときは仏法は衰える」（『歎異抄聴記』要旨）

また曾我は、敬伏よりも護念が正直な感じであるという。

・神祇の問題

・『歎異抄』が問題とする神祇とはなにか

・現代における神祇の問題 人間を超えた何かにすがりたい、身をまかせたいという誘惑がある。

人間の思いをこえた力が人生に深い意味を教えることになる。さまざまな自然現象、思いをこえた力が私たちの人生にどのような意味をもってくるのでしょうか。

第十一首は金光明経による。信心の行者においては、よい鬼神（あまつかみ、くにつかみ）は、

⑥ 魔界外道も障碍することなし。

・妙音院了祥科文「魔界不障」

・「魔界」と「外道」との関係

「魔界」 恐怖と快樂の誘惑、心の内に本来的にあるさわり（俱生起煩惱）

本来的にもっている死をいたずらにおそれ、幸福に固執する心情。魔 mAra 魔は煩惱によって菩提をさまたげ、鬼は病悪を起して命根を奪うものとする。〔化末〕魔波旬 pApIyas

「外道」 思想的誘惑、分別によって起る心のさわり（分別起煩惱）

思想や意見によって人間を惑わし、縛るもの。

このように魔界は俱生起の煩惱（我執・法執）である。快樂と恐怖。娯楽と病気。外道は分別起の煩惱（我執・法執）である。仏教に敵対する思想。私を実体化し、事象（教法）を実体化する。

これら内なる魔と外なる外道はふたつで一つの生死にとどまらせるはたらきをする。

・魔界と外道の問題

- ・『歎異抄』が問題とする魔界と外道とはなにか
- ・現代における魔界と外道の問題

・曾我の「魔界・外道」理解

「三悪道は外道である、阿修羅、天は魔界がある。これらは禍いをなす。」「魔界・外道はみな宿業本能の中に働いている妄境である。〔…中略…〕我々が迷信邪教になる種子をもち、迷信邪教に惑わされるから、魔界外道がはびこってそれに障礙される。」

（『歎異抄聴記』抄出）

三悪道 ……外道
阿修羅・天……魔界

また曾我は、神祇は善鬼神、魔界外道は悪鬼神としてとらえているように思える。

・「障碍することなし」……仏道においてさわりとなることやさまたげることがない。

⑦ 罪悪も業報を感じることあたはず。

妙音院了祥科文……「業繫無索」

・「罪悪」……罪と悪、もしくは罪障であるような悪業。

・罪悪とは具体的になにか

- ・『歎異抄』が問題とする罪悪とはなにか

第一章「罪悪深重煩惱熾盛の衆生」

「自身は現に是れ罪悪生死の凡夫」（『聖典』（第2版）242頁）

- ・現代における罪悪の問題

・業報はなくなるならない。「業報を感じることあたわず」とは、業報として感ずることが

ないということ、つまり「遇斯光のゆえなれば／一切の業繫〈ゴフニツナガル²〉ものぞこりぬ」（『讚阿弥陀仏偈和讚』）とか「ひとたび光照かぶるもの／業垢をのぞき解脱をう」として機能しない。

罪悪は、罪悪が信心の行者に於ては業の報いを感じることができない。結果をうけないというのではない。「軽微なり」（現世利益和讚）や「業繫をのぞき」（『浄土和讚』）などにあるように、また阿闍世の回心の言葉にあるように、苦としないということ。

⑧ 諸善もおよぶことなきゆへなり

二、諸善無対 …諸善もおよぶことなきゆえに

・「諸善」とは、往生、成仏のためのもろもろの善行。諸であるような善。ここでは、他力の念仏以外のあらゆる作善をいう。さまざまな人間的関心による善。

外道の相善、聖道の諸善万行、浄土門の定散二善

・次の第八章の「非行非善」との関係。

・諸善の問題

・『歎異抄』が問題とする諸善とはなにか

・現代における諸善の問題

諸善とは、さまざまな人間的関心による善である。これに縛られることで人は驕慢となる。有漏有為の善、虚仮雑毒の善、有為は虚仮不真実、有漏は雑毒不清浄である。諸であることがもつ問題。

・第七章の罪悪と諸善との関係罪悪と諸善を分けるのは、『歎異抄』が善悪に強い関心をもつことによるのだろうか。

諸善は、「諸善もおよぶことなき」とは、諸善によって迷わされているという事実があったからであろう。

罪を犯したらすくわれないうって脅し、善をしなくては救われないと威す。

「第三の利益は阿弥陀の撰取のはたらきのもつ意味のうちでもおそらく最も重要なものでしょう。信の人はもはや自分の業の報いに悩むことはない。」業の輪廻からの解放。

・「罪悪」と「諸善」との関係について……第一章と第七章の対応

本願を信ぜんには	信心の行者には
「他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆえに」	……「諸善もおよぶことなきゆえに」
「悪をもおそるべからず、本願をさまたぐる	……「罪悪も業報を感じることあたわず」

² 「業繫」には、文明本に「ツミノナハニシバラル、ナリ」、国宝本に「ゴフニツナガル」、顕智本に「アクゴフノツナトイフナリ」（『浄典全二』338頁）の左訓がある。「業垢」には国宝本・顕智本に「アクゴウボムナウオモノゾキゲダチオモウ」の左訓がある。

⑨ と云々

【第七章 参考資料】

また現生護念の利益をおしえたまうには、〔…中略…〕

「彼仏心光」ともうすは、「彼」は、かれともうす。「仏心光」ともうすは、無碍光仏の御こころと、もうすなり。

「常照是人」というは、「常」は、つねなること、ひまなく、たえずというなり。

「照」は、てらすという。ときをきらわず、ところをへだてず、ひまなく、真実信心のひとをばつねにてらし、まもりたまうなり。かの仏心に、つねにひまなくまもりたまえば、弥陀仏をば不断光仏ともうすなり。〔…中略…〕「摂護不捨」ともうすは、「摂」は、おさめるという、「護」は、ところをへだてず、ときをわかず、ひとをきらわず、信心ある人をば、ひまなくまもりたまうとなり。まもるというは、異学・異見のともがらにやぶられず、……（聖道外道）

別解・別行のものにさえられず、……（諸善）

天魔波旬におかされず、悪鬼・悪神なやますことなしとなり。……（魔界）

「不捨」というは、信心のひとを、智慧光仏の御こころにおさめまもりて、心光のうちに、ときとしてすてたまわずと、しらしめんともうす御のりなり。〔…後略…〕

（『一念多念文意』（『聖典』（第2版）頁）

・第七章から第八章へ

念仏者となることよる利益を見事にのべる第七章は、第八章によってさらに説明されなくてはならない。第七章で無碍という生き方が私たちの念仏としての行う行であり・善根にあるとする。その思いを徹底的に念仏者の分別を否定する。